

第7次自己点検・評価委員会活動報告書

1. 期間

平成19年4月～平成21年3月

2. 委員

木原 裕（物理学・教授，中央委員会委員長）

〈教育活動小委員会〉

岡崎和一（内科学第三・教授，委員長）

藤井 茂（化学・教授）

富田 浩（男山病院・薬剤部長）

高井 俊（学部事務部・部長）

〈研究活動小委員会〉

赤根 敦（法医学・教授，委員長）

杉本哲夫（解剖学第二・教授）

足立 靖（病理解剖・准教授）

内藤 勉（大学情報センター・業務部長）

〈管理運営小委員会〉

木下 洋（小児科学・准教授，委員長）

澤田 敏（放射線科学・教授）

加納稔夫（男山病院・事務部長）

友久壽恵子（男山病院・看護部長）

3. 主な活動

〈平成19年度〉

本委員会は、前期第6次委員会のあとを受けて、1年目は、作成されている自己点検・評価報告書を基に、大学基準協会の実施視察を受けること、不断に報告書で提起された改善項目を点検し、その進捗状況の点検を行った。視察の結果は、平成20年3月に報告され、基準に照らし、財務状況についての勧告付きながら、適合していると認定された。

〈平成20年度〉

- (1) 点検・評価報告書を編集、発行した。冊子体は少数にとどめ、配布用にはCD版を編集・発行した。
- (2) 前年度に引き続き、検討項目を見直した上で改善方策の進捗状況を点検した。
- (3) 自己点検・評価活動の長期プランを検討した。
- (4) 財務活動の勧告への対応を行った。

- (5) 長期プランに基づき、本委員会の位置づけを見直し、それに合致するよう規定の変更を行った。
- (6) ブレインリサーチセンターからの依頼を受け、同センターの評価を行った。

資料：

- (1) 大学基準協会実地視察・財務ヒアリングへの対応(19/10～11)と認証評価取得(20/3)
[別添資料1-1、2、3]
- (2) 改善方策の実施状況点検 [下記及び別添資料2-1, 2]
- (3) 自己点検・評価に関する規程の変更(21/1) [別添資料3]
- (4) 点検・評価報告書(CD版)編集、発行(21/3) [別添資料4]
- (5) 大学基準協会よりの改善報告書の検討結果通知(21/3) [別添資料5]
- (6) 認証評価スケジュール [別添資料6]
- (7) 学術フロンティア推進事業中間評価報告書(21/4) [別添資料7]

4. 教育・研究・管理運営各分野の改善方策の実施状況と未解決の課題(次期委員会への引継ぎ事項)

(1) 教育

ア. 改善方策の実施状況

- ① 大学院FDを実施した。
- ② チュートリアル教育の改善を目指して、ワークショップの開催、チューターガイドの作成など、多くの試みを続けている。
- ③ 卒前・卒後臨床教育の充実を目指して、5, 6学年の臨床実習カリキュラムを改善した。
- ④ シミュレーション教育の充実のために検討委員会を設置して、内容の検討を始めた。
- ⑤ 大学院教育の一層の充実を目指して、修士課程の設立、臨床系大学院コースの新設など多くの改革案を検討した。
- ⑥ 教養教育のあり方委員会答申にもとづく教養部での心身教育の一端を担うため「健康・スポーツ医学」を「健康科学」に改編して開講した。
- ⑦ 医師不足問題に大学として対応するために、H21年度より地域、特別診療科枠をもうけた入試制度に変更し、入学定員を100名から110名にした。

イ. 未解決の課題

- ① 大学院の活性化については、まだ種々の試みが結実するに至っていない。臨床研究の活性化を含めて、さらに検討を続ける必要がある。
- ② 不足問題については、入学してきた学生にどのような教育を授けていくか、これからの課題である。
- ③ 臨床教育の充実については、さらに努力を要すると思われる。今後も不断の改善を望みたい。

(2) 研究

ア. 改善方策の実施状況

- ① 学長主導のアドホック委員会（大学院活性化委員会）にて大学院に臨床系社会人コースを新設し、本学附属病院の専修医等が勤務しながら大学院に入学し研究できる体制を設け、臨床系教員の研究活性化を図ることを検討した。
- ② 附属枚方病院勤務のため滝井での大学院講義等に参加しにくい教員、大学院生のために遠隔講義を行い、研修機会の改善を図った。
- ③ 産学連携を進めるために組織整備を図った。
- ④ 附属生命医学研究所生体情報部門の教員を増員し、総合研究施設との間の組織整備を行った。また実験動物施設関係との効果的運用についても検討している。
- ⑤ 大学情報センターでは、学外からイントラネットにVPN経由でアクセスできるサービスを開始し、メールの送受信、図書館を通じた学術情報へのアクセスなどを可能にした。動画・映像配信サービスを拡大し、ALC（英語 e-learning システム）サービスも開始した。滝井、枚方間の遠隔会議・講演中継をサポートしている。
- ⑥ 図書館では、オンライン雑誌を増やした。また業績データベース、研究者データベースの構築を行った。

イ. 未解決の課題

- ① 科学研究費については、学長主導により、応募件数、採択件数とも低落傾向を脱することはできたが、さらに努力する必要がある。
- ② 引き続き、大学院を中心として研究環境の整備に取り組まなければならない。

(3) 管理運営

ア. 改善方策の実施状況

- ① 中長期経営ビジョン「ジャンプ 2020」、 「アクション 2015」に基づいて、長期資金収支計画を策定し、機関決定した。平成 20 年度は、この計画を大学基準協会宛てに提出した。長期計画に基づき、平成 21 年度予算を組んだ。平成 21 年度は、帰属収支の 10 億円黒字達成、法人全体の最終キャッシュフローの黒字化を達成することを目指している。次年度からは、半期単位の決算を行うことにより、予算達成体制の強化を図ることとなった。
- ② 平成 20 年度の SD として、新入職員フォローアップ、新任管理職研修、ミドル層研修会、事務職員研修会、DPC 研究会などを行った。
- ③ 教員評価の方法を改善し、高評価者には図書券を贈呈するなどインセンティブを与えるべく改善を図った。
- ④ 一般職人事制度改革案を策定、決定し、多数の説明会、研修会を催して、意見の聴取、趣旨の徹底を図った。
- ⑤ 自己点検・評価委員会に関する規定を改正し、より合理的な活動ができるように改善を図った。

- ⑥ 第7次認証評価結果報告を刊行した。教員の業績については、研究業績データベースを作成し、インターネットで公開した。
- ⑦ 大学の焦眉の問題を速やかに解決することを目指して、いくつかのアドホック委員会を立ち上げ、多くの問題を改善している。

イ. 未解決の課題

大学の財政基盤についての基準協会からの改善勧告は、かなり厳しい自己改革を求めてきている。引き続き経営の合理化を行い、基準協会に対して理解を求めていかなければならない。

5. その他

- ① 点検・評価報告書（CD版及び冊子）は別添資料の通り関係者・関係先に配布する。
- ② 今期は、大学基準協会への対応に委員会の主力を注いできたが、本来の自主的な自己点検・評価活動とどのように調整していくかは今後の課題である。特に看護学校の活動等の評価については、今期の委員からも意見があった。
- ③ ブレインメディカルリサーチセンターより、同センターの評価を依頼された。
- ④ 本報告書をもって次期委員会への引継ぎとしたい。

以 上